

---

# マルティーン・ヴァルザー 『第13章』

## —— 憧憬の三部作 —— (その3)

洲 崎 惠 三

---

### 要約

「憧憬の3部作」第3作目は『第13章』という書簡体小説である。大統領主催のノーベル賞医学受賞者還暦晩餐会で、作家 Basil は Maja 夫人の魅力の虜となる。手紙を出すと、思いがけず返信があり、やがて相聞の色彩を帯びてくる。しかし1度も現実に出会うことはない。Maja は癌の夫と Yukon の原野に消えていく。主題は「不可能の可能化」。言葉は、生の深淵の上にかかる虹の橋。無の装飾。愛の不可能を可能にしたのは Karl Barth と Charlotte von Kirschbaum。野生の呼び声は無意識 es の自然本能。Freud によれば、快感と現実原理、衝動と理性、生への意志と死への回帰、Eros と Thanatos、両者の相克が文化芸術の根源主題である。『愛の瞬間』では La Mettrie の『人間機械論』は「人間自然論」とされる。Manfred Eigen の、物質から有機生命の誕生、核酸と蛋白質の結合による生命細胞の自己組織能力ハイパーサイクル理論は、Dionysos の誕生と八つ裂きと再生神話に通ずるものがある。生と死の交錯する自然の根源世界の象徴としての Dionysos。M. Walser は2015年秋 Nietzsche 賞授与のさい、*Zarathustra* を批判する Thomas Mann に対し、詩の言葉は美しく、美は生への意志を増強するとして、ツァラトゥストラを勇気の鼓舞者だと讃えた。しかし Th. Mann の Nietzsche への苦悩の愛は *Doktor Faustus* に結晶化されている。創造と破壊をくり返す Dionysos 世界を amor fati で生きぬくために、生成に存在を刻印し、静止する今 (nunc stans) としての芸術作品を創作すること。Apollo 的美による、八つ裂きの Dionysos 的苦からの再生へ、その弁証法運動に両作家のかすかな希望がある。

キーワード： (1) 不可能の可能化, (2) Karl Barth と Charlotte von Kirschbaum,  
(3) 生命力増強としての美, (4) Dionysos, (5) Martin Walser と Thomas Mann。

### 0. はじめに

2015年10月17日、88歳の Martin Walser に、Naumburg で Friedrich Nietzsche 賞が授与された。書簡体小説『第13章』(2012年、85歳) は、Martin Walser がみずから「憧憬の3部作」と名づけた『わが彼岸』(2010年、82歳)、『母の息子』(2011年、84歳) につづく第3作目である。この間その理論的エッセイともいえる『義認試論』(2011年、84歳) という Harvard 大学講演の改訂増補版が上梓された。

義認 (Rechtfertigung) は、パウロやアウグスティヌス以来、人間ではなく、神の裁可である。人間には不可視、不可知の神への道は、希望なき希望という否定弁証法の道しかない。信は不信、不信は信と裏腹である。愛もしかり。しかしこの不可能を可能にしようとする希望なき希望の否定弁証法プロセスこそ人間の生死ともいえる。Friedrich Nietzsche, Karl Barth を神と人間との否定弁証法的関係でとらえた義認論は第一級の興味尽きせぬ論考である。

もちろんこのエッセイだけがニーチェ賞授与の根拠ではないだろう。2010年出版の『生涯にわたるニーチェ』(Nietzsche lebenslänglich) には、Martin Walser の小説、詩、エッセイなどに言及されたニーチェが732回にのぼることをコンピューターが告げている。その序文や、受賞エッセイで Walser がみずから触れた Thomas Mann のニーチェ受容との比較も含め、この問題は小論の結論部で総括する。

### 1. 往復書簡体小説『第13章』 („Das dreizehnte Kapitel“) の5主題

書簡体小説はたとえば Goethe: *Werther* や Hölderlin: *Hyperion* のように親友宛の虚構の手紙により構成される。現実の Franz Kafka と Felice Bauer あるいは Milena Jesenská との間の往復書簡が全体として一つの愛の物語となる場合もある。

『第13章』は、271頁。2部に分かれ、第1部26章、第2部25章から成る。往復書簡であるが、日付が入るのは第1部第18章(2010年10月16日)から、第25章(2010年11月23日)まで。第1章と第26章は主人公の手記。第2部は、第1章から日付(2010年12月23日)があり、第24章(2011年8月21日)まで。結び第25章のなかに、2011年8月27日と29日付手紙がある。手紙だけではない。I-Phone による Mail が後半多くなる。

『第13章』の主人公である作家 Basil Schlupp は、夫人同伴で、ノーベル医学生理学賞受賞者 Korbinian Schneilin 脳外科学教授の還暦を祝う、Berlin の Bellevue 城館におけるドイツ連邦共和国大統領主催のパーティに招待される。十数名の主賓テーブルで大統領夫人の隣席に指名着席。神学教授である Maja Schneilin 夫人は斜め前に座る。すぐに夫人の魅力の虜となる。返報の期待なしに同席挨拶の手紙を送付。2週間後思いがけず、夫人の返信が届く。そこから奇蹟のような文通が始まり、やがて相聞歌の色を帯びてくる。しかし相聞の度合いがどのように強まろうとも、その後の出会いは一度もない。むしろ Basil は妻 Iris との、Maja は夫 Korbinian との夫婦愛を深め、後者夫婦はカナダの Yukon の原野に消えてゆく。

この書簡体小説に、要約できるようなストーリーはない。しかしその背景にはいくつかのモチーフがある。以下5点に整理する。

- (1) Karl Barth (以下 KB) と Charlotte von Kirschbaum (以下 Lollo) との往復書簡にみられる、不可能を可能にする愛。
- (2) 言葉は現実という深淵の上にかかる吊り橋。人間と神の間の架け橋。小説は無のデザイナー。魂の手引書。
- (3) カナダの Yukon を舞台にした Jack London の『野生の呼び声』(*The call of the wild*)。
- (4) 主題旋律は作者自身の根源的テーマであり再三再四反復される Odysseus の遍歴と Penelopeia

回帰という愛と性のモチーフ。パウロ『ローマ書』第13章。

- (5) 核酸とタンパク質連鎖の偶然の読み取りエラーが生命の起源であり、自然物質には生命細胞を含め自己組織化再生能力が潜在するという Manfred Eigen 理論。

## 2. 不可能の可能化, Karl Barth—Charlotte von Kirschbaum 往復書簡

『第13章』の、第1部2010年11月8日付、Basil あて Maja 夫人の手紙は、「不可能の可能化」を主題として、Lollo 宛 Karl Barth の手紙を引用している。

「私たちが二人とも独身であるなら、いま取り返しのきかなくなされたこの発見は、神が私たちの暗闇のまっただなかで愚かな、まちがった人間の子である私たちにときおり授けてくださるあの春、歓び、生命の瞬間のひとつでしょう。こういう事情では、この発見は苦悩と断念の瞬間でもあって、その必然性について私たちは、ふたたび神の義を信じて、いぶかしく思ってはなりません。それはほかのことを自明のこととってはならないのと同じです。」(KB an Lollo, 1926.2.18. S.24)

周知のように、スイスは Aargau 州 Safenwil のプロテスタント教会牧師だった30歳台の Karl Barth (1886.5.10~1968.12.10) は『ローマ人への手紙講解』(“*Der Römerbrief*“, 1919年第1版, 1922年第2版)を世に問うて、キリスト教界のみならず、第1次世界大戦後の戦火さめやらぬ精神世界に激震を惹き起こした。この業績により KB は1921年 Göttingen 大学の特任教授、さらに1925年 Münster/Westfalen 大学のキリスト教教義学と新約聖書釈義学講座の正教授に招聘され就任する。

新約聖書のパウロ (Paulus von Taurus, BC10~AD60) の『ローマ人への手紙』を釈義したこのいわゆる『ローマ書』を読んで心動かされた人々の一人に Charlotte von Kirschbaum (1899.6.25~1975.7.24) がいる。父はドイツ陸軍少将だったが、彼女が17歳のとき第1次世界大戦中フランスで戦死。故郷 München で赤十字看護婦修業。新教機関紙「時代の間」(„*Zwischen den Zeiten*“)の編者の一人であり当地の牧師であった Georg Merz が導師となって、共にKBの講義を聴いたのは24歳頃といわれる。Merz は、初版14か月後も300部しか売れなかった『ローマ書』第1版1000部の残り700部を、自ら神学顧問役だった München の Kayser 社で引き取らせ販売すると、人気を呼び、重版を求める読者に応ずる必要があったことが、第2版執筆の一因となった。

『ローマ書』第1版序文(1918)に、この出版は Zürich で歴代手広く鉄鋼関係商會を営む Pestalozzi 家の Rudolf (=Rudi) が出版助成をするという条件で出版社が引き受けたと書かれている。Zürich 湖を見下ろす Oberrieden の丘に Rudolf とその妻 Gerty Pestalozzi の建てた通称 “Der Bergli” といわれる山小屋別荘があり、KB は「時代の間」仲間とともに夏の休暇を過ごすようになっていた。1925年夏 Lollo は Georg Merz と Bergli を訪問、半月ほど初めて KB といっしょの夏を過ごす。1925/26年の年末年始 Lollo (このころから愛称 Lollo と呼ばれた) は招かれて Göttingen の Barth 家に滞在した。

二人の人生を決定づけた日は1926年2月24日。KB39歳, Lollo は13歳年下の26歳。熱意ある懇請に応じて Lollo は病院勤務地の Krefeld から Himmelreichallee 43/Münster の新居の KB を訪問した。閑静な住宅地で、いま Mensa (食堂) を含む学生会館などがその湖畔に立っている Oase に近い。家族

はまだ Göttingen にいた。KB には母の勧めに従い1913年に結婚した当時32歳の Nelly (1893~1976) と、5人の子供がいた。3日後「ただひとつ言ってよいことは、私があなただを好きなこと、私がそう考えるよりははるかに好きなこと、それは私にわかります。」という1926年2月27日付 Lollo の手紙に対する返答が、上記の引用書簡である。続いてKBは核心を吐露する。

「この発見された現実、何よりも、私の愛する、忠実な、勇敢な Nelly にとって苛酷で辛いものであることは、おわかりでしょう…いずれにせよ到来することは、それぞれちがったありかたであるにせよ、3人が背負う悲しい出来事です…どのように解釈しても Nelly にとって未曾有の擾乱です… Nelly に対する罪…私は、言うことと、していること、言動のあいだのアンバランスを黙過するのではなく、それに対し闘わなければなりません。…モラルのためではなく、信仰と希望の裏面としての規律…」(1926.2.18, S.23~30)

Lollo 事件を、現世で最大の神の恵みと思うと同時に最も苛酷な判決と自覚しながら、自分たちのこの神から恵まれた愛情を断念することなく、忠実な妻子との三角関係のなかで、なんとしても両者を両立させたい、すなわち不可能を可能化しようとする試みが、以降激しい起伏のなかでつづく。離婚の危機は津波のようにいくども押し寄せたが、結果的には35年間 Münster, Bonn, Basel で3人同居の生活を実現させた。

「Nelly は妻として、ともかくこの座は1度しか占めることはできない以上、あなたには私の愛する不可欠の同僚 (Kameradin) Lollo として愛するという、矛盾葛藤に陥らざるをえないということのないように、どんなことも他の関係、全くちがう秩序のなかで生きるということは、不可能であり、許されるべきことではないのでしょうか？」(1926.5.25)

ふたりの最大の理解者であった Gerty と Rudi Pestalozzi 夫妻の山小屋 (車庫の上に客間を増設) Bergli で夏の休暇を共に過ごすなかで、Lollo は KB からラテン語やアラビア語を習って『聖書』や『詩篇』などを読み、神学の必要文献を学び、やがて KB の資料収集整理、原稿の浄書のみならず、大学講義や各種の講演の準備も手伝い、教会・学会関係者との応対も含めて、不可欠の秘書役に成長する。

Lollo を、余人をもって代えがたい秘書役として、同じ家に同居させたいという KB の願いは、Nelly や親族などの強い抵抗に会いながら、3年半後の1929年10月15日、Münster の Barth 家での同居で実現する。1929年冬学期 KB は Münster 大学神学部長を務めたが、Bonn 大学から招聘され、1930年3月19日転居する。Bonn の住まいで Lollo には KB の書齋に隣接する秘書室が用意された。

不可能なものの可能化は困難を極める。「大地はいたるところまたいつでもめりこむようでもあり、支えることができないような状態です。すべてはどうしてこのように重いのでしょうか。」(1930.9.7) 三人の同居生活は煉獄であった。Nelly の不満、Lollo の不定愁訴、KB の罪の意識。1930年8月21日付 Lollo 宛 KB の手紙：Nelly の爆発に対し、なすすべを知らない。私はへまな男で、ほんとうに罪があり懲らしめられるのは正しい。Nelly は Lollo に信頼を寄せていない。よそで暮らすべきである、Lollo のそばにいと、息をする空気もなく、生きる空間もない、という。私は Nelly からもうかなり遠く離れてしまった。

「しかしあなた (Lollo) の、私には形式的に嫌いな、荒れ狂う (rasend) とか狂気の (wahnsinnig)

という言葉は何回も使った、あなたの不機嫌と非難の反復を考えると、私は完全に揺さぶられることを、不安と悲しみのなかで、あなたに言いたい。…このまま進めば2年も経たないうちにすべては失われてしまう。…ひょっとすると精神病院へまっさきに行くのは、われわれ3人のうち私なのです。…私があなたに言えるのは、あなたを想うことが私にとり慰めや自信であるばかりでなく、助けであることです。…私に欠けるといつも寂しいと想うのは、あなたひとりなのです。」(1930.8.21, S.140)

1935年3月、Hitler 宣誓拒否などを理由にナチス政権下のプロイセン国家職業管理法により Bonn 大学を免職させられたKBは、2日後には Basel 大学教授職に就く。Nazismus への抵抗、告白教会、自由ドイツ運動など、時代に対するKBの対処と態度決定に Lollo の援助は不可欠だった。しかし彼女の何よりの功績は、KBのライフワーク、Thomas Aquinas の2倍の分量もある『神学大全』といわれる『教会教義学』(Die kirchliche Dogmatik) 成立への献身と寄与である。この現代の *Summa Theologica* が未完となったひとつの大きな原因は、Lollo が認知症に罹り1966年から10年以上、Basel は Riehen の施設 Sonnenhalden で療養生活を余儀なくされたことである。KB は Nelly とともに日曜日ごとに見舞いを欠かさなかったが、Lolloより先に1968年12月9日82歳で亡くなった。KB と Nelly は Goethe『Faust II』第5幕の仲睦まじい老夫婦 Baucis と Philemon のような神の恩寵ともいえる晩年を過ごした。Lollo は1975年7月24日76歳、Nellyは翌1976年84歳で逝去。3人とも Basel 市立墓地 Hörnli の同じ堂内に埋葬されている。不可能を可能にした3人の同居生活は、さらに2008年 Nelly を含みKBの子供たちが編纂者となって『カール・バルト=シャルロッテ・フォン・キルシュバウム往復書簡』(2008) が上梓されるという奇蹟を生んだ。

### 3. 不可能の可能化、言葉は現実という深淵の上にかかる吊り橋

不可能を可能にするのは、愛だけではない。言葉もしかり。

Basil: 手紙を書くことは私にとって冒険的。手紙が私をどこに運んでいくかわからない。あなたの手紙の作用は魔術的。言葉により可能化される作用、それはあなたの人間そのもの。読むということは、完全な現前化。私はあなたを見る、聞く。(I-4, 42f.)

Basil: あなたの手紙が魔術的な作用をもつのは、あなたが何も望んでいないから。(I-6, 61)

Maja: Karl Barth は神を未知の神と呼ぶ。言いたいのは、希望への希望なしでしか信ずることができないということです。自己を捨棄できないのに、自己を肯定か否定として自分で義認(正当化)しようとするのは、それだけで裁かれる。義認は、神に対しても人間に対しても求めることがないときにのみ、存在する。それは可能性なき可能性です。宗教的と呼ばれうる感情は、歴史性を全く欠いている体験、すなわち純粋な「ここといま」です。

Basil: 「われわれの文字の鎖は、現実という名の深淵の上にかかる吊り橋です。神学者も小説家も、言葉の外には何もないことを、知っています。われわれはひとつの職業、無の室内装飾者、無のデザイナー (Dekorateure des Nichts) です。もう一つつけ加えれば、心の解説書としての小説、小説としての解説書。その証拠は Sigmund Freud です。20世紀の大小説家のひとり。市

民の目を開かせた。Nobel 賞に値します。医学ではなく文学の。Karl Barth も同じです。すべてはひとつ、すなわち無を装飾、無の勲章。」(I-13, 111f.)

第1部の終わり、Basil は、Tegel 空港の人ごみのなかで、Maja を見かける。しかし iPhone には受信文なしとしかでない。手紙の交換は「空無に架かる橋」「希望のない希望」だったのだろうか？絶望は存在しない。ただ存在しないものに対する言葉だけは存在する。「神は存在しないというのは、神は存在するというのと同じく無意味だ。」(I-26, 168) それは愛においても同じであろう。神の有無への問答は空しい。あるのは神という言葉だけ。神の像を作るなかれ。神は言葉 (ロゴス logos) なり、という意味のひとつはそこにあるのかもしれない。

言葉こそ不可能を可能にする。言葉は無 (虚空) の上にかかる吊り橋。「無の支配」。人間と神の間の架け橋。無を有に、有を無にするのは言葉である。その試みが無のデザイナー、無の騎士であるこの小説ともいえるのではなからうか。Zarathustra はいう。「言葉と音調とは、永遠に隔てられている者同士のあいだに架け渡された虹、幻の橋ではなからうか。」「音調に合わせてわれわれの愛は七色の虹の上で踊るのだ。」(Der Genesende. II,463)

#### 4. 妻 Iris, 『ローマ書』第13章

作家 Basil Schlupp の妻は Iris Tobler といい、子供向けテレビ番組シリーズを書いている。München で交雑により犬から再び狼に飼育する可能性研究で獣医学 Doktor を取得。Berlin の建築家 Beatus Niederreither と仲良くなるも、Basil と32歳前で結婚。Beatus は10年後多発性硬化症 MS を発病、Iris に一月に一度車椅子を押してもらおうよう懇願。彼女はそこから帰宅すると言葉のない日が何日かつづく。

何も来ないとしても待つことを、Basil は Iris から学ぶ。すなわち待つこと自体が Iris の実践の本質であって、直接何かに導く意図をもつどんな企ても拒否するのだ。何に仕えるべきかを示す目的奉仕性はみな彼女には嫌で悲しい。Iris は実はひそかに想いついた箴言を書き留めている。「私の文はどれも、狭隘と息苦しさに悩んでいる」。もしだれか私が書いていることを知るなら、私は書くことはできない、と言っている。それが Iris の最も内面の秘密だ。そのことをあなたに漏らす。これは裏切りです。その題名は『第13章』です。

第2部25節の最終章で、Beatus Niederreither はピストル自殺。その知らせがあった日、Iris は無言で暖炉の火に原稿を1枚1枚投げこんでいた。何を燃やしているのだ？「第13章よ」。その題名をばくにくれるかい？いいわ、と言って、Iris はその両手を Basil の膝の上に置いた。どのような愛の遍歴を重ねようとも、故郷イタケーの Penelopeia のもとに帰ってくるというのが、Martin Walser の愛の小説の骨組みである。「第13章」とは何か？

パウロ『ローマ人への手紙』第13章は、神と国家、権威への服従に関する有名な1章である。封建絶対君主の王権神授説の根拠にもされた。しかしパウロの主意は神の義への全的信仰である。Karl Barth は、聖書に記されたキリストの言葉を第一義として、Hitler 政権への抵抗の基とした。日常想いついたアフォリズムの集積である Iris の「13章」には、パウロとのつながりは見出せない。

M. Walser が、戦争責任、Vietnam 戦争、分割祖国再統一など主要時事問題に積極的にアンガージュし、権威や同一的思考法に激しく抵抗し、個の人間性実現をその作品の主題にしてきたことを考慮に入れるなら、国家など絶対権力への盲目的信徒などは最も遠いテーマである。義認は人間ではなく神のみの御業であるというパウロの警告を念頭にした、おのれを含め義はわが側にありとする当今の思考法に対する、自他への戒めなのかもしれない。

あるいは、愛だけは、権威や反抗、正義や不正、善や悪の彼岸にある、神から恵まれた人間の希望であるとすれば、Basil=IrisとKorbinian=Majaの夫婦愛の13章なのかもしれない。OdysseusのPenelope回帰である。さればこそこの小説『第13章』は、妻「Kätheに」という献辞がついているのではなかろうか。隣人という他者のなかにおいても、自分を含む「一者」を見る者は、自分自身を愛するように隣人も愛する。

## 5. 荒野の呼び声 (Jack London)

2011年3月17日付のMajaの手紙：私たちを正当化するのは、見込みのなさです。見込みがないということこそ、私たちの正当化証明（義認）です。見込みがなかったからこそ、許され、できたのです。私たち二人とも「あたかも～のように」演じてきました。不可能性と戯れてきたのです。(II-10, 200)

4月12日、夫Korbinianの腹腔に悪性腫瘍ありと知って、Majaは書く。私は彼なしには生きられない。夫だけが死ねば、夫は一人です。夫が私を最果てまで連れて行ってくれるときにのみ、私はまだ存在する。それを夫に言わねばならない。(II-13, 205)

4月15日、Clausthal-ZellerfeldのSt.Salvatoris教会にあるWerner Tübkeの有名な翼祭壇画に描かれた十字架に掛けられたキリスト像に、Majaは夫の姿を見る。(II-15, 208f.)

6月2日、Schneidelin夫妻は庭師Roderlichを伴い、カナダのWhitehorseを皮切りにYukon河に沿って北上するKlondike Highway (旧Yukon Trail)を、キャンプしながらサイクリングする。Pelly Crossing, Stewart Crossingを渡り、Dawsonの温泉に向かう。さらに原始時代の風景の未舗装のDempster Highwayを走ってEagle Plainsまでさすらう。熊に注意！という標識がある。ユーコンの原野を北上する自然と夫婦の心の描写はいきいきしている。おそらく作者の旅の体験が盛り込まれているのだろう。

Yukon南部の先住民Tutchone (First Nation) 族の妻と住む、犬橇の御者で友人のGeorgeからもらった本を、Roderlichは夫妻に一部朗読する。夫がこれほど真剣に聴き入ったことはない、と妻は感じる。Jack London (1876~1916) の“*The Call of the Wild*“(『野生の呼び声』1903)である。(II-16, 217, II-17, 232f.)

主人公Buckは大型のエスキモー犬(Husky)で、先祖は狼である。1896年KlondikeでのGoldrush時代、一獲千金を目指すあまたの人びと、物資、器具などを運ぶために犬橇が重用された。Santa Clara Valleyの判事屋敷で安穏な日々を過ごしていたBuckは、庭師に連れ出されて売られ、船でDyeaに運ばれ、金鉱探しの中心地Dawsonまで仲間とともに北上する。Jack LondonがDawsonに

来たのは22歳、金鉱探しはうまくゆかなかったが、自己を投影させた Buck 小説で自身の内面から金を採掘し、アメリカの小説のなかで全世界に最も多く翻訳されたベストセラーを生み、40歳の若さで死んだ。

Yukon の荒野にこだまする狼の遠吠えに Buck の血が激しく騒ぐ。

「生きものを殺すよろこび、血まみれの快感。そこには生の頂点を極めるエクスタシーがあった。最も生命があふれるときこの陶酔に襲われ、しかもおのれが生きているということを完全に忘れるという形でやってくるのは、生き物のパラドクスである。この陶酔、この生の忘却は、情熱の一面の炎に包まれ、我を忘れた芸術家をも襲う。群れを率い、昔ながらの狼の叫びを響かせながら、月光を浴びて目の前をすばやく逃げていく生きた獲物を必死に追いかけていく Buck にもやって来た。Buck の叫びは、おのれの自然存在の深みから発する声だった。おのれ自身より深く、時間の母胎に遡っていく、存在の深層からの地鳴りであった。Buck は、命の激しい渦巻、存在の潮のような波に飲みこまれた。」(要訳, 270)

夫 Korbinian：おまえはぼくのそばに残ってくれるかい？

妻 Maja：いつも、いつまでも。(II-16, 227)

私が行くのはただ、行き先がどこであろうと、私はあなたのそばにいる、ということ、夫に示したいの。(II-18, 243, Dawson City, 2011.7.3)

Schneilin 夫婦は、「この道緊急サービスなし」という標識を超えて、熊に襲われる危険のある Yukon の荒涼たる原野に消えていく。

これは外と内の野生の呼び声に呼応して狼の群れに戻る Buck の自然への回帰ではない。

生命の原始状態、自然の無機存在への先祖帰りへの願いであろう

Martin Walser が、Karl Barth と並んで魂の解説者と名づけた Sigmund Freud は、これを人間の二大本能の一つ、死への衝動 (Todestrieb) と言った。人間の心のなかには、生と死、Eros と Thanatos の衝動 (本能) があり、せめぎあっている。死への本能とは、生命の起源状態に退行 (Regression) し、自然の無機状態に安息したいという衝動本能である。

Buck の野生の呼び声は、むしろ野生の生、原始の獣の生命の叫び、生への衝動である。あるいは喰うか喰われるか、死と背中あわせの苛酷な生存競争の本能の叫びである。

この生死の本能のせめぎあいを、文化は示さねばならない、と『文化の不安』(IX, 481) はいう。エロスとタナトス (生と死)、性衝動と破壊衝動、無意識と意識、es と自我の相克である。

## 6. 快感原理と現実原理、es と自我、Eros と Thanatos (Sigmund Freud)

S. Freud は『快感原理の彼方』(*Jenseits des Lustprinzips*, 1920年54歳) で快感原理と現実 (自我) 原理を拮定し、『自我とエス』(*Das Ich und das Es*, 1924年58歳) で人間の魂ないし心の構造を、無意識のes、意識の自我 (ich)、超自我 (Überich) とに3分した。心を動かす動因は、不快を避け、快を得ようとする、快感ないし快楽原理である。Lust とは「~する気がある」「気持ちがいい」という「気」とも訳される。「気」があるかどうか、人を動かす動力なのだ。しかし本能的衝動的快の追



求は、現実生活の利害に抵触するゆえに、人は「現実原理」を優先し、快感充足を抑制抑圧 (Verdrängung) したり先伸ばしたりする功利経済を考慮する。快原理は人間の意識下の本能衝動 (Trieb) であり、現実原理は意識、自我、知性である。Nietzsche が意識ではなく無意識に心を動かすものを es と使っているのを援用して、Freud は無意識の衝動、本能を es (ed) と呼び、そこに貯水されているエネルギーを Libido と名づけた。それが生への意志、Eros の衝動であるなら、性衝動、性エネルギー、libidoこそ es の源泉である。この衝動は、自己中心的で自制力なく盲目に猪突猛進し、野生野蛮状態を生むゆえに、これを監視、制御、抑制するのが自我の知性的倫理的機能である。文明社会システム、法、倫理などは、自我原理、理性による、本能の抑圧の上にある。文化、芸術などは抑圧された衝動の代理補償、昇華 (Sublimierung) といわれる。超自我とは父の原理であり、es よりも ich への監視が強く、良心や罪の意識となる。Bachofen は、古代母権性時代の母の原理を感性、大地、衝動とし、父の原理を精神、天、理性とした。母を月、父を太陽とした。母権性時代が終わるのは Aigisthos と不倫の母 Klytaimnestra を討って父 Agamemnon の仇討ちをした息子 Orestes 裁判で Athene の 1 票で Orestes が無罪になったときであるという。性本能を忌避し、聖霊、精神 (Geist) と神と息子が首座につくキリスト教時代が現代にいたる父権時代の始まりだという<sup>1)</sup>。人間存在の本質は、支配、抑圧の論理である理性ないしロゴスなりとするのが、Hegel を頂点とする西欧思想の主流であったのに対し、正負の符号こそ違え、生への意志、本能なかならずエロスこそその核心なりとする系譜は Schopenhauer, Nietzsche を経て Freud に至る。性衝動こそ生への意志の焦点である。精神に対する本能の優位、理性の崩壊。Th. Mann はこの逆転こそ「あらゆる価値の価値転倒」だという (ThM, IX, 691)。

しかしフロイトは本能優先の世界観により、同時代の知性蔑視、反精神、夜、闇、非合理、反動の潮流に迎合したわけではない。無意識衝動の精神分析による自然科学的解明を目指したのが深層心理学である。事実 Freud の著書は1933年焚書坑儒、38年ナチスのオーストリア併合後、London に亡命、翌39年83歳にて死去した。『幻想の未来』(Zukunft der Illusion, 1931) の末尾「人間の知性は人間の本能生活に比べれば無力であると、どんなに強調されても仕方ないし、正しいかもしれない。しかし知性の声は低い、それが聞き届けられるまでは休むことはない。何度もくり返し拒絶されたあと、最後には耳を傾けるひとが現れる。人間の未来に楽観的になってもよい数少ない点の一つであるが、意味するところは小さくない。知性の優越はたしかに遠い先のものであるが、おそらく無限の彼方ではないようだ。」(XIV, 377) という言葉に、Th. Mann は人間の知性へのかすかな希望をみる。(ThM, IX, 277)

## 7. La Mettrie と Manfred Eigen (『愛の瞬間』)

Martin Walser 文学を解く鍵のひとつに、長篇小説『愛の瞬間』(Der Augenblick der Liebe, =AL, 2004) における主人公 Gottlieb Zürn の La Mettrie 講演「呼応がすべて」(Entsprechen ist alles) がある。

神の代りに自然を、世界や人間の第一動因とした『人間機械論』(L'Homme Machine, 1747) の La Mettrie (1709~1751) と、自然物質の自己有機組織化能力を解明した Manfred Eigen (1927.5.9~) を

論じている。医師兼哲学者の La Mettrie はその著作によりフランスを追われ、北のソロモン王ポツダム の Friedrich II 世にかえられた。機械 (Machine) とは、産業革命や現代のIT機械ではない。L'Organisation は、有機組織である。たとえば1725年のフランス総合辞典では、解剖学用語として性器自体がL'Organisation なのである。精神や、魂ないし心 (die Seele) も同じ。肉体の状態と一体であり、相互に呼応しあう。

L'Organisation (有機組織) は自然 (die Natur) と独訳すれば完全に近い。すなわち『人間機械論』は『人間自然論』なのだ。ラ・メトリにとっては、自然がすべてであった。万物の第一動因 (primus motor immobilis) は神とされた座に自然を据えた。その差異は、自然は感覚 (der Sinn) で体験され、研究され、証明される。思弁 (spekulieren) してはならない。どの表象がどの経験から由来しているのか。感覚が経験しうるものに、哲学は呼応しなければならない。哲学が呼応しなければならないのは自然である。哲学は真理を言わねばならない。全宇宙にはさまざまな形相をとるにせよ存在するのは、ただひとつの実体 (die Substanz) ないし物質 (die Materie)、すなわち自然だけである。人間はそのうち最も完全なものである。認識の源泉としての感情 (Empfindung als Erkenntnisquelle)。思考条件としての享楽 (Genuß als Denkbedingung)。存在経験としての快楽 (Lust als Seinserfahrung)。存在の意味としての幸福 (Glück als Sinn des Daseins)。これがラ・メトリ哲学の要素である。春の到来を思わせる。しかし、感じることができ善悪の判断もできる人間は純粹に物質的自然であるというラ・メトリの見解を、教会も大学も許さなかった。(cf. MW: AL, 114~126)

1967年ノーベル化学賞を受賞したドイツの生物物理・化学者である Manfred Eigen (1927.5.9~) は、70年代「マクロ分子の自動触媒的ハイパーサイクルへの自己組織化問題」(das Problem der Selbstorganisation von Makromolekülen zu autokatalytischen Hyperzyklen) を提唱し、この核酸とタンパク質の相互結合作用連関を生命の発生理論 (物質の自己有機化能力) に応用して人類に多大な貢献をした。La Mettrie が L'Organisation と呼んだものは、この生命細胞の自己組織化ないし自己再生能力であろう。

自然はそれ自体のなかに、われわれが何であるかのすべてを内包している。遺伝子コード (ein genetischer Code) である。それはどの核酸 (die Nukleinsäule) 文字とどの蛋白質 (das Proteine) 文字とが対応ないし呼応 (entsprechen) しているかを示す翻訳の鍵である。核酸は立法機関であり、蛋白質は執行機関である。核酸連鎖による蛋白質成分のコード化プロセスにおいて、対応コードの偶然的読み取りエラー (ablesen) という突然変異が起こる。これが生命 (単細胞) の発生である。DNA 分子と Protein 分子の結合の超循環が生命という新しい形態を生み出すまでには20億年という気の遠くなるような時間を要したが、人間誕生にいたる両者の結合ハイパーサイクルは、さらに10億年を闊した。Manfred Eigen 自身の言葉：

「〈物質の自己有機組織化〉(Selbstorganisation der Materie) ということわれわれが理解しているのは、明確に言えば、所与の周辺条件を厳密に守って定義された相互作用と結合から生ずる能力、すなわち自己再生構造を産み出す特殊な物質形態の能力にほかならない。」「われわれは生の現象を物理学や化学の法則に還元することによって次のことをけって否定するものではない。

すなわちこの有機組織の新しい次元はこれに対してのみ典型的で特有の形式において示されること、いやそれどころか物質的組織からついには物質的ではない作用も産み出されるのである。」(MW: AL, 126)

これは宇宙にはただひとつの物質ないし実有 (Substanz) しかなく、人間はその最も完全なものだという La Mettrie の言葉が対応する。「自分自身が作ったのではないが、自分がそうであるひとつの機械を、人間は自由意志によって操縦できるだろうか。」人間の精神や心はそのつど肉体的有機組織の状態に呼応する。その逆もまた同じ。魂もこの有機組織に属する。いまの言語でいえば心身一体論である。

La Mettrie は何事も自己の経験から出発する。自己の感覚ないし知覚があらゆる判断の源泉となる。自己の経験や感情、すなわち amour-propre (自尊) を、考えた一切の確認や反駁のためにつねに援用する。世間の偏見や、恣意の慣習にすぎない美德や、罪の意識の鎖を解き放つことが彼のモチーフである。その著作は自己自身の生に由来する統計学だった。自己の経験から自己の感覚で認識したものを、人間と市民としての自分、自己の快楽とモラルの上に適用し、快楽とモラル一般に関し言表したゆえに、ラ=メトリは非難と中傷を浴びた。『享楽術』(*L'art de jouir*) は Lessing や Diderot からは Porno 学として非難された。「自己をテーマにせよ」が、Montaigne から受け継いだ La Mettrie のモットーだった。いうまでもなく Martin Walser 自身の出発点であり目標でもある。ふたりの仮面のない仮面である。

## 8. Nietzsche 賞受賞エッセイ「勇気の鼓舞者」*Zarathustra*

### (1) *Zarathustra* 評価

2015年10月17日 Naumburg の国際 Friedrich Nietzsche 賞が88歳の Martin Walser に授与されたが、その受賞エッセイ「勇気の鼓舞者『ツァラトゥストラはかく語りき』」(„Also sprach Zarathustra“, *Der Mutmacher*) が2015年11月8日付 FAZ 紙に掲載された。

焦点は、Thomas Mann のニーチェ論との比較、すなわち詩人と作家、美とモラルの対比である。M. Walser 曰く：「『われわれの経験の光に照らしてみたニーチェ』論 (1947) ほど Th.Mann のエッセイのなかで私にとって興味深くかつ挑戦的なものはない」。

Th.Mann の Nietzsche に対する関係は、一つは、世界と超世界のこの精神的に醜陋したさすらい人に対する根本的留保、いわば「リューベク的な不信」、もう一つは、「意に反する賛嘆」(Widerwillige Bewunderung) ではなかろうか。Th. Mann のエッセイで心動かされる場所は、ニーチェの文に圧倒され屈伏しても、しばらく熟慮して賢明にニーチェを称賛せざるをえないところ、すなわち ambivalent (正反感情併存) な「意に反する賛嘆」である。たとえば、ニーチェの宿命はその天才にあるが、これは病気という別名をもつ。この病気は狂気へと導く「破滅的な刺激状態」でありながら、天才的な創作を生み出す母胎となる作曲家を主人公とする *Doktor Faustus* 生誕のひとつの説明になるかもしれない、と M. Walser はいう。

リューベクの市民的モラルの反撥や、ambivalent な意に反する賛嘆は、たしかに *Doktor Faustus*

において、語り手 Serenus Zeitblom の Adrian Leverkühn に対する布置に現れている。しかし両者は、FaustとMephistophelesのような、己の魂のなかに住む、秘かな非同一性の同一性である。*Doktor Faustus* には Hamlet の悲劇的な生涯に対する Ophelia の「ああなんと高貴な精神がここに破壊されてしまったことか」という嘆きのような愛情が根本にあると論者は思う。さればこそ親しい人たちを招いた最後の告白の場で昏倒した Adrian を、乳母 Schweigestill (沈黙の静寂) 夫人は Pieta のように優しく抱くのだ。すなわち Th. Mann にとり Nietzsche は、認識の十字架に架けられた Dionysos であり Jesus でもある。

Th. Mann は、自分の限界を示すにすぎないかもしれないが、*Zarathustra* は Nietzsche の最良の書ではない、彼は偉大な批評家であり文化哲学者であった Schopenhauer の流れを汲むヨーロッパ最高ランクの散文家、エッセイストであり、その天才は『善悪の彼岸』や『道徳の系譜』の時代にその頂点に達した、という。文体上の傑作、言語表現の真の力作は、自伝『この人を見よ』の *Zarathustra* の章、『善悪の彼岸』の *Meistersinger* 序曲の分析、『力への意志』末尾の、宇宙の Dionysos 的描写などである。批評に比べ詩人としては、個々の抒情的瞬間は別として、創造的な根源性をもつ長時間の作品を生むには不十分であった。*Zarathustra* は「レトリック、興奮した語呂合わせ、苦し紛れの声、怪しげな予言、しばしばほろりとさせられはするが、たいがいはやりきれぬ、どうしようもない大公身分の尊大威厳のタイプ、滑稽さの境界でふらつく怪物」(IX,683) と辛辣である。

一方、1943年16歳で *Zarathustra* に出会い、その「夜の歌」の「私の魂もほとぼしる泉だ」を自伝小説 (*Ein springender Brunnen*, 1998) の表題にするほど、自己の出発点でありいわば聖書であった M. Walser にとって、*Zarathustra* の音調と文体はいままでドイツ散文のなかで鳴り響いた最高の調べであるという。この観点から、Th. Mann は *Zarathustra* 評で中庸平凡な (mittelmäßig) な文芸評論家となっていると M. Walser は酷評する。Th. Mann が「私にとりニーチェは最大のドイツの文筆家だ」というとき、最上級は戸外競技場用の使いかたで文学的水準に達していない、言葉の政治だと批判しながら、自分も最上級を用いている。

単純化していえば、両者の差異は、Dichter (詩人) と Schriftsteller (著述家)、生の審美性 (美) と生の倫理性 (モラル) のどちらに軸足をおいているかにあるのかもしれない。

## (2) 道化にすぎぬ！ 詩人にすぎぬ！

Martin Walser にとり、*Zarathustra* の情熱あふれる語りから身を離すことはできない。Yes や No で反応するのではない。その語りかけに虚心に耳を傾ける者は、その言動を共有する。そこに起こることは自分にも起こる。その語りは、自分のことを言っているのだと思ってよい。それは肯否の判定を超え、論争の彼岸にある。ひとりの神が私のなかを踊り過ぎていく。見知らぬ神、異国の神 Dionysos。

*Zarathustra* に対し「おまえは道化にすぎぬ！ 詩人にすぎぬ！」(Nur Narr! Nur Dichter!) と (R. Wagner を念頭にした) 老魔術師はくり返す (*Das Lied der Schwermut*, II, 533ff.)。この詩は1889年正月『ディオニューズ頌歌』(*Dionysos-Dithyramben*, II,1239ff.) に再登場する。

「おまえは真理への求婚者か？／いや詩人にすぎぬ。／忍び歩きして、獲物を狙う、狡猾な者、／

嘘をつかざるをえぬ、／それと知りつつ、嘘をつかざるをえぬ、一匹の獣。／獲物欲しさに、／  
 いろいろな仮面をかぶり、／おのれ自身を仮面となし、／おのれ自身を獲物とする－／それが真  
 理への求婚者なのか？／いや！ 道化にすぎぬ！ 詩人にすぎぬ！／七色の言葉を語り、／道化  
 の仮面から七色の叫びをあげ、／虚妄の言葉の橋を渡り歩き、／七色の虹の上、／まやかしの天  
 と地のあいだを、／さまよい、漂う者、－／道化にすぎぬ！ 詩人にすぎぬ！」(II, 533f. / II, 1239)  
 天と地のあいだの、七色の虹の橋を渡り、七色の仮面をつけて、七色の言葉を語る者、それは詩人  
 にすぎない、道化にすぎない。

「つまり／鷲のようだ、豹のようだ、／詩人の／憧れというものは、／汝の憧れは千の仮面の下に  
 ある、／汝道化よ！汝詩人よ。」(II, 1241)

真理の獲物を狙って、天に旋回し、地に忍び寄る、狡猾な鳥獣、仮面をかぶり、虚構を創り、虚言  
 を弄さずにいられぬ者。それは、道化であり、詩人にすぎぬという自覚であると同時に、詩、ない  
 し詩人存在の憧れと意味を問う。

本稿の主題である「憧憬の3部作」の Sehnsucht (憧れ) の意味でもある。

Zarathustra という言語存在。詩は言葉にすぎない。しかし純粋な言葉は、純粋な力をもつ。純粋  
 な詩は美しい。美しいものは生きる力を与える。このエッセイの要である。

Zarathustra が太陽に向かって「照らされる者がいなければ、太陽とはいったい何だろう」(II, 275)  
 というのと同じく、読者は Zarathustra の語りを自分のこととして共有してよいのだ。そのとき自分  
 も道化であり詩人にすぎない。しかし Zarathustra や Dionysos 頌歌の美しい朝日に照らされた者は、  
 それ以前よりより多くの生の可能性が増えたと感ずる。美は生きる力の増大である。これこそ「力  
 への意志としての芸術」「この世は美的現象としてのみ是認される」という命題の意ではないだろう  
 か。Martin Walser がニーチェ受賞エッセイのタイトルに「勇気を与える者」としたのはこの謂いで  
 あろう。

「勇気と冒険、不確実なもの、未だ敢行されざるものへ立ち向かう快樂、つまり勇気こそが人間の  
 太古の歴史のすべてなのだ。／この勇気が、洗練され、霊化され、精神化されて、鷲の翼と蛇の  
 賢さをもつ人間の勇気となった。今日その名で呼ばれる者こそ…… Zarathustra だと、みな異口同  
 音に叫んだ。」(IX, 538 / II, 1240)

鷲は天空で円環を描き、蛇は地上で円環のとぐろを巻く。同じものの永劫回帰を肯定し、この現在  
 の生を生きぬこうとする勇気(運命愛)が、力への意志である。

ドイツ語の力=Machtは、mögen=mayの縁語で、Möglichkeit (可能性) の意も内包するとすれば、  
 力への意志とは、生の可能性への意志ともとれる。したがって芸術は生の可能性への希求とも解釈  
 できる。

## 9. 神の不在と希求, Dionysos

### (1) 永遠の自己創造と自己破壊の Dionysos 的世界

けっして消し去りえないカトリックの子供時代を過ごした Martin Walser にとって, Nietzsche の「神は死せり」という最も引用されるセリフは, やりきれぬ気まずい困惑であったという。繊細さの極致といえるニーチェにはなんといっても単純すぎないだろうか? ニーチェの水準以下にあるのではないだろうか? このいやな困惑が解消され, ニーチェの「神の喪失」ということの意味を体験できるようになったのは, Karl Barth の『ローマ書』との出会いによるという。「神は死んだ」という文は, KB においては, 「未知の神, 希望への希望なしにしか信ずることのできない者としての神」「信仰は空虚への飛躍である。」となる。

神の死と, 神への希望なき希望の信仰. Nietzsche と Karl Barth との関係究明は『義認論』に極まる。<sup>2</sup> この二人の牧師の子は, 両者とも神の不在を甘受できず, 未来に神の到来への望みを捨てることはできない。しかし到達可能な日付を知らない, 希望なき希望である。不可視でいまだ来臨せぬ未知の神への絶えざる否定弁証法運動のアプローチこそ, 人間の現在の生であるのかもしれない。死して成れ (Stirb und werde) という脱皮の生成と存在こそ, 「人間は克服されるべきものだ」(Der Mensch ist etwas, das überwunden werden muss.) という Zarathustra の教説なのかもしれない。

K. Barth と Nietzsche の神は異なる。前者にとっては Christus の父神が, 後者にとっては Dionysos という自然神が, いまだ到来せざる, 未知, 不可視の神である。

「いかに多くの新しい神がなおも可能であることか!」(Ⅲ,838, *Dionysos*, 1038) Zarathustra 自身はたんに年老いた無神論者であるにすぎない。しかし信ずるとすれば「舞踏することを解する神のみを信ずるであろう。」(Ⅱ,307) Dionysos 対「十字架に架けられし者」。この対立は, 殉教という点では差異はない。「十字架に架けられし神は, 生の呪詛であり, おのれをこの生から救済しようとする指示である——八つ裂きにされた Dionysos は, 生の約束である。それは永遠に再生し, 破壊から立ち還ってくるであろう。」(Ⅲ,772f.)

Th. Mann がドイツ語散文の珠玉の傑作と絶唱した『力への意志』の末尾の節:

「この世界とは, 初めもなく終わりもない巨大な力, 増大することも減少することもなく, 消耗するのではなく変転するのみの, 潮の干満, …力として遍在し, 諸力の波浪の戯れとして一であると同時に他である, …永遠の自己創造と自己破壊の Dionysos 的世界…この世界は力への意志である—それ以外の何ものでもない! 君たち自身もこの力への意志であり—それ以外の何ものでもない。」(Dionysos, 1067 / Ⅲ, 916f.)

〈永遠の自己創造と自己破壊の Dionysos 的世界〉。始めもなければ終わりもなく, 増大も減少もなく, 創造と破壊の相克が繰り返される, 寄せては返す海のような底知れぬエネルギー力の永劫回帰, いわば無の反復を, 運命愛 (amor fati) をもって肯定し, 生きぬかんとする力への意志。世界も人間もその生も, いわば Dionysos なのだ。

## (2) Dionysos —破壊されざる生の原像

Dionysos 神という名ほど、「力への意志」と「同じものの永劫回帰」を一身に象徴するものはない、と Heidegger はいう。生成としての存在者と、恒常性としての存在者とを一体化する者である。エネルギー保存法則理論との関連もあるだろう。「生成に存在の性格を刻印すること——これが力への意志の極致である。」(Ⅲ,895) 力への意志としての芸術の項のこの命題は、Dionysos ないし Dionysos 的なものの核心でもある。Dionysos とは何者なのか？

Dionysos 神話は多岐にわたる。生誕地 Nysa もどこかわからない。Persephone が Hades にさらわれた野山だ。ギリシアではなさそうだ。Thrakia や Phirygia や Lydia (現在のトルコ) から海を渡って来臨したという説もある。いずれにせよギリシアにとっては異国の神 (Ein fremder Gott) である。Orpheus 教や Kreta 祭祀で Dionysos と重ねあわされる Zagreus (野獣を捕える者) は、Zeus が蛇に変身して Demeter との間の娘 Persephonhe との近親相姦で生まれた第1の Dionysos である。すなわち神のみならず冥府の血も流れている。嫉妬深い Hera に唆された Titanes 族は、牡牛姿の Zagreus を八つ裂きにして喰らう。怒った Zeus は雷霆で巨人族を焼き撃つと、その灰から人間が生まれる。Athena は Zagreus の心臓だけを救い出し、Zeus はこれを呑みこむ。トラキア=フリュギアの大地母神、ないし Tebai なる Kadmos 王の第4女 Semele は Zeus の寵愛を受けるが、Hera に欺かれ、奥方のところへ行くのと同じ姿で来てくださいと懇願する。Zeus の本体、雷光により Semele は焼け死ぬ。Zeus は6ヶ月の胎児を大腿に縫いこむ。月満ちて生まれた乳児は Nysa の山中でニンフたちに育てられ、やがて巫女たち (Mαινades) を狂わせる。Dionysos は Lerne の底なしの沼から死者たちの国に降り、母を救い出し、Olympos に昇天させたともいわれる。

ギリシア悲劇の主人公は Prometheus にせよ Oedipus にせよみな Dionysos の仮面変形にすぎないと『悲劇の誕生』(I, 61) はいう。Dionysos 神話は、世界の八つ裂き状態の苦悩そのものを表す。根源的一者「意志」の個体化の原理こそ、世界の苦悩の源泉である。Dionysos の魅りは、個体化からの解放、全一への帰一である。「現存するすべてのものは一つであるという基本認識。個別化は諸悪の根源であるという観察。個体化の原理の呪縛は打破できるという喜ばしき希望、回復される全一性の予感としての芸術。」すなわち Olympos の神々という Apollo の夢の世界創造による、八つ裂きの苦悩救済の希望。Dionysos の微笑から生まれたのが Olympos の神々、涙から生まれたのが人間なのだ。(I,62)

M.Heidegger も K.Jaspers も参考を指示しているドイツの神話学者 Walter Friedrich Otto (1874~1958): *Dionysos, Mythos und Kultus* (1933) 『ディオニューソス—神話と祭儀』は有名である。その研究は何よりも神話と祭祀に依拠するが、その文体は Martin Walser が Karl Barth の表現を評したように、詩のような魅力がある。一言で言えば、Dionysos 神とは、存在するものの原現象、生と死の錯綜する始源世界、自然の創造と破壊を体現するというのが、その骨子である。自然における生命の、生と死と再生という渦巻状の循環、その生成と消滅との愉悦と狂躁、快と苦という二重性の対立相克が、Dionysos や Mainades (狂乱女)、来臨と失踪、八つ裂きと再生などに象徴されているとした。

Karl Kerényi はその『ディオニューソス—破壊されざる生の原像』(*Dionysos — Urbild der*

*unzerstörbaren Lebens*, 1976) で、Walter. F. Otto は Dionysos のなかに「創造的な狂気、世界の非理性的な根拠」を見たが、Nietzscheに距離をとることができなかったため、Dionysos的なもののエロスの根本特性は閉じられたままであったといっている。(KK,9)

しかしたとえば性や生殖について『偶像の黄昏』(*Götzen-Dämmerung*, 1888) というのは。Dionysos の秘儀にギリシア人の生への意志本能が示現している。永遠の生、生の永劫回帰。死と変転を乗り越える生への肯定。「生殖、性の秘儀による総体的な生命の継続としての真の生。」生殖、受胎、誕生の営みは畏怖すべき生の象徴。苦痛を伴う産婦の陣痛は、新たな生命を産む神聖な創造の快感。生殖という生への道そのものが神聖な道として感じられている。このすべての意味を象徴しているのが Dionysos という言葉である。(II, 1031)

ギリシア語には生(生命)に対し二つの言葉があると、K. Kerényi は指摘する。Zoé (ゾーエ) は、あらゆる生き物の生、あまり特性のない生、無限の生である。Bios (ビオス) は、他と区別される輪郭や表情をもつある特定の生、ある特性のある有限の生である。たとえばある伝記 (Biographie) は後者である。前者 Zoé は、死 (Thánatos) と相容れない非死 (Nichttod) である。Homer のように、Psyché (魂) と Zoé を同一視し、Platon の *Phaidon* では、魂の不死を証明する根拠となる。比喩でいえば「Zoé は Bios の一つ一つが真珠のように通して並べられる糸であり、Bios と対照的にひたすら無限に連続するものと考えられる。」(KK, 13) 生命は「代謝 (Stoffwechsel) と遺伝 (Vererbung), そしてその結果として成長、繁殖、進化が、生命あるものを、死の物質から差異化する。生命が自己のなかに遺伝を内蔵することにより、生命は個々の死すべき生命存在の限界を打ち破り、個々の生命として不滅であることが明らかとなる。生命は不滅性によって、時間的無限性の胚芽をもつ。」かくして Kerényi は Dionysos を「破壊されざる生の原像」(Urbild des unzerstörbaren Lebens) とみる。(cf. Vorwort, 10)

個々の死すべき有限の生、固体化の原理による可視の現象と、生殖による生命の魅りと持続、遺伝子の不壊の連鎖。これはManfred Eigenの生命の自己再生組織化のハイパーサイクル理論に通ずるのではなからうか。

## 10. Martin Walser と Thomas Mann

「まことに、君たちに告ぐ。私から離れ、抗い、拒みなさい! …私は君たちを欺いたかもしれない。君たちはまだ自分自身を探し求めなかった。探し求めぬうちに私を見出した。…君たちに命令する。私を捨て、君たちを見出すことを! そして君たちのすべてが私を否定することができたとき、私は君たちのもとに戻ってこよう。…そのとき今とは違った愛で、君たちを愛するだろう。」(II, 340. *Von der schenkenden Tugend*)

この忠告は「距離化への要請」ではなく、Zarathustra 教説の信用性増大と感じとれると、M. Walser というのは。一方 Th. Mann は、ニーチェを読むのもひとつの芸であって、留保、イロニー、老獪が必要であるという。「一言でいうと、私がニーチェのなかに見たのは何よりも自己克服者である。私はニーチェの言葉を何一つ言葉どおりには受けとらなかった。彼の言うことをほとんど信じ



なかった。そしてこのことこそ、私のニーチェへの愛情に二重に情熱的なものを与え、深みをもたらしたのだ。」(XI,120) たとえば『Wagner の場合』の Bizet: *Carmen* 讀を本気にとる者は、それはただWagnerへのアンチテーゼにすぎず、千分の一の価値もないという言 (IX,708) に面食らう。ニーチェの発想自体に二重底のイロニーがある。人間存在に内在する恐るべき実相を求め、不条理と不公正ともいえる生の真理に耐え、悪魔と死に付き添われた騎士のようにひとり道なき魔の山を登り、その超人的な課題のために精神の薄明の迷宮に迷いこみ、思想の十字架上に殉死したニーチェ。マンのニーチェ受容の要は、このニーチェの生の悲劇に対する二重にも三重にも深い情熱の陰影をもつ愛情である。『魔の山』の Peperkorn 像に酩酊の Dionysos と磔刑のキリスト像を仰ぎ見たように、母国、時代、生の根源問題を一身に背負って自己磔刑したニーチェにマンは苦悩にみちた熱い明察の愛を注いだ。『Faustus 博士』はその深い愛と苦悩の文学的総決算である。『われわれの経験に照らしてみたニーチェ』は、1947年1月27日 *Doktor Faustus* 脱稿後、同年6月初旬 Zürich における第二次世界大戦後初の Pen Club 世界大会講演依頼により書かれ、Pacific Palisades の自宅で Horkheimer や Adorno 夫妻、戦後初の欧州旅行の途次 Washington で A. E. Meyer などにも朗読した。

1927年 Boden 湖畔 Wasserburg 生まれの Martin Walser と、1875年ハンザ同盟都市の Lübeck 生まれの Thomas Mann 文学は、各自の生きた時代を反映しているだろう。エロスとモラル、個の自由と市民的倫理、解放と抑制、快感原理と現実原理、本能と理性といった価値観は、周知のように1945年を境目に劇的に転換した。

ニーチェの審美主義に対し、人間の生のもう一つの核であるモラルや理性の役割についての彼の誤認を説いたからといって、Th. Mann が生を呪詛する抹香臭い禁欲的道德主義者であると思うのは的外れである。Th. Mann 文学の基層を流れる水脈の一つは、Eros の襲撃 (Heimsuchung) モチーフである。たとえば、初期短編群の『ちびの Friedemann 氏』、Venezia の迷路に美少年を追跡する榮譽ある作家 Gustav von Aschenbach、自然に欺かれた女 Rosalie von Tümmeler。そして、宦官を夫にもつエジプトの純潔の月の尼 Mut=em=Enet (砂漠の谷の母) の、美少年 Joseph に対する狂乱の恋の描写は、Th. Mann 文学の最も生き生きとした花とも蜜ともいえる詩のような文体と音調の美しい果実である。抑圧された性衝動のマグマは Dionysos 的狂躁となって噴火し、安定充足せる Apollo 的生活形式の土台を切り崩す。Eros の仮面をかぶる Dionysos 神の出現により、落ち着いた品位ある Apollo 的堤防は決壊する。

人間の意識下の幽暗に抑圧された Eros の衝動を、Apollo の矢である言語表現により光の形式に昇華すること。芸術作品は、あるいは本能の代償充足、白日夢という幻想であり、仮象の Olympos かもしれない。七色の言葉は、現実という深淵の上にかかる橋、獣と神の間にかかる虹の橋にすぎないかもしれない。詩人は道化、物語作家は魔術師ないし高等詐欺師かもしれない。しかし、Dionysos と Apollo の否定弁証法運動の所産たる芸術の美は、凄惨な生の実相に耐え克服し、永劫回帰する生成と破壊の世界に、nunc stans (静止する今) という存在を産み出す。無に有を、無意味に意味を、過ぎ去りゆく今に永遠を刻みこむ。生きぬかんとする意志は、美により強化される。「生成変転に存在静止の性格を刻印することこそ、力への最高の意志なのだ」(N, III, 895)

Th. Mann も M. Walser も、時代こそ違え、老年になればなるほど Eros の諸相を描いた。R.

Baumgart が Th.Mann を Eros の作家と名づけ<sup>3</sup>, M.Reich=Ranicki が, 戦後もなお統計上 Th.Mann 作品の需要が群を抜いているのは Eros という要因だといっているのはうなずける。晩年 Anton Tschechow が両者の作品に登場する。M. Walser は『第 1 3 章』の次作『演出』(*Inszenierung*, 2013 年, 87歳)で, Th. Mann は『チェーホフ試論』(1954年, 79歳)で。前者には『かもめ』演出に絡み, 作家トリゴーリン, ニーナ, アルカジーナの愛情関係を下敷きに, 演出家と妻と恋人との心情交流が, 後者には, 『退屈な話』の老教授 Nikolai Stepanytsch とひそかな恋心の相手, 女優 Katja との間答が描かれている。それがなければ人生の意味もむなし, 理念や神といったものが欠けているゆえに, 「私はどうすればよいの」という女の問いに, 「私にはわからない」としか男は答えられない。しかし, とマンはいう。それでもなお, 仕事をして, 読者が楽しみ, より美しい, 精神にふさわしい生へのかすかな希望をもてるように, 物語を創りつづけたいと結んでいる。

無意識と意識, カオスと秩序, 質料と形相, 陶酔と夢, 暗闇と光明, 衝動と理性, 母性と父性, 自然と精神, 総じて Dionysos と Apollo の相剋。Dionysos なくして, Apollo なし。Apollo なくして Dionysos なし。両芸術衝動の弁証法運動が産み出す美の創造に, 八つ裂きの人間生存の苦悩超克へかすかな希望を見出すこと。Martin Walser と Thomas Mann の接点 Nietzsche の位置づけも, 『憧憬の 3 部作』の憧憬の彼岸もそこにあるのではなからうか。

\*

テキスト：(引用文献箇所は本文中に記載)

Martin Walser, 2012 : *Das dreizehnte Kapitel*. Rowohlt Reinbek 『第 1 3 章』(I, 2 は I 部 2 節を表す)  
2016.11.9 : „Also sprach Zarathustra“ *Der Mutmacher*. FAZ, Feuilleton 『勇氣の鼓舞者』  
2004 : *Der Augenblick der Liebe* =AL 『愛の瞬間』, Rowohlt Reinbek

参考文献：(引用文献箇所は本文中に記載)

Martin Walser, 2010 : *Nietzsche Lebendlanglich*. Hoffmann und Campe, Hamburg 『生涯にわたるニーチェ』  
2012 : *Über Rechtfertigung, eine Versuchung* 『義認試論』. Rowohlt Reinbek.  
1997 : *Werke in zwölf Bänden*. Hg. Von H. Kiesel, Suhrkamp Frankfurt/M. 『全集全12巻』  
*Karl Barth-Charlotte von Kirschbaum. Briefwechsel. Bd.I 1925–1935*. 2008, Hg. von Rolf-Joachim Erler, Theologischer Verlag Zürich  
Karl Barth, 1922 : *Der Römerbrief (Zweite Fassung)* In: Karl Barth: Gesamtausgabe II, Akademischer Werke (2010), Theologischer Verlag Zürich. 小川圭治, 岩波哲夫訳 2001 『ローマ書講解』平凡社  
Eberhard Busch, ©1975, 1978<sup>3</sup>: *Karl Barths Lebenslauf*, Kaiser München. 小川圭治訳, 1989 『カール・バルトの生涯』新教出版社  
Karl Kupisch, 1977: *Karl Barth*. Steinkopf Stuttgart. 宮田光雄他訳 1994 『カール・バルト』  
宮田光雄, 2015 : 『カール・バルト—神の愉快的なパルチザン』岩波現代全書 080  
Thomas Mann, 1960: *Gesammelte Werke in zwölf Bänden*. Fischer, Frankfurt/M. =ThM

1930 : *Die Stellung Freuds in der modernen Geistesgeschichte*. Bd.X

1936 : *Freud und die Zukunft*. IX

1947 : *Nietzsches Philosophie im Lichte unserer Erfahrung*. IX

1955 : *Versuch über Tschechow*. IX

Sigmund Freud : *Gesammelte Werke*, S. Fischer Frankfurt/M.

1920, *Jenseits des Lustprinzips*. In: Bd.13 (1920–1924) ©1940, Imago, London/1963<sup>4</sup> Fischer

1924, *Das Ich und das Es*. In: Bd 13, a.a.O.

1927, *Die Zukunft einer Illusion*. In: Bd. 14 (1925–31) ©1948, Imago /1963<sup>3</sup>, Fischer

1930, *Das Unbehagen in der Kultur*. In: Bd. 14

Walter F. Otto, 1933 : *Dionysos–Mythos und Kultus*. 1980<sup>4</sup> Klostermann Frankfurt/M. 西澤龍生訳, 1997  
『ディオニューソス—神話と祭儀』論創社

Karl Kerényi, ©1976 : *Dionysos – Urbild des unzerstörbaren Lebens*. ©1976 Lungen, Müller, München, Wien  
/1994 Klett-Cotta, Stuttgart. 岡田素之訳 1993 『ディオニューソス—破壊されざる生の根源像』白水社 =KK

Martin Heidegger, 1961: *Nietzsche*. 2Bde. Neske, München. 細谷貞雄訳 1975 『ニーチェ』, 理想社

#### 注

1. cf. 洲崎惠三, 2002 : 『トーマス・マン—神話とイロニー—』溪水社, 106f.
2. cf. 洲崎惠三, 2013 : 「正当性証明(義認)試論」, 「つくば国際大学研究紀要19」51–68頁
3. Reinhart Baumgart, 1989 : *Selbstvergessenheit. Th.Mann, F.Kafka, B. Brecht*. Hanser München

## Martin Walser: *Das dreizehnte Kapitel* (Trilogie der Sehnsucht-3)

—— M.Walser, K.Barth, Fr.Nietzsche und Th.Mann ——

Keizo SUZAKI

**Resümee (Deutsch):** *Das dreizehnte Kapitel* (2014), der dritte Roman der Trilogie der Sehnsucht, ist ein Briefroman zwischen einem Dichter Basil und einer Nobelpreisiträgersfrau Maja. Um dessen 60. Geburtstag zu feiern, lud der Bundespräsident mehrere Gäste ein. Dabei hat sie ihm gefallen. Ohne Hoffnung schrieb er ihr. Unerwartet erwiderte sie. Ohne miteinander wirklich zu begegnen, ist der Briefwechsel eine Art von Liebesbriefen geworden. Aber Maja ging mit ihrem totkranken Mann in Yukon's Urwald verloren. Sind die Wortketten Scheinbrücke des Regenbogens zwischen Ewig/Geschiedenem? Sprache ist Dekoration des Nichts. Es handelt sich um Ermöglichung des Unmöglichen. Verwirklichten aber Karl Barth und Charlotte von Kirschbaum ihre Liebe nicht? The call of the Wild ist ein Trieb der unbewußten Natur. Nach S.Freud ist der Konflikt zwischen dem Lust- und Realitätsprinzip, Trieb und Vernunft, dem Willen zum Leben und der Regression zum Tode, Eros und Thanatos eines der wichtigsten Themen der Kunst bzw. Kultur. In *der Augenblick der Liebe* (2004) hielt man „L'Organisation“ in La Mettrie's *L'homme machine* für die Natur selbst. Nach Manfred Eigens Lehre über „Selbstorganisation der Materie“ enthält die Natur Fähigkeit spezieller Materieformen, selbstreproduktive Strukturen hervorzubringen. Also das Leben! Das scheint eng mit dem Dionysos-Mythos zusammenhängen. Karl Kerényi sagt: „Dadurch, daß das Leben Vererbung in sich schließt, besitzt jedes einzelne sterbliche Lebewesen den Keim des unzerstörbaren Lebens. Das Leben als Unendliches nennt das griechische Wort <zoé> und das begrenzte Leben <bios>. Dionysos-Mythos, seine Geburt, Zerrissenwerden und Wiedergeburt ist Urbild der unzerstörbaren Lebens. Nietzsche-Preis(2015) -Träger Martin Walser behauptet gegen Thomas Manns Kritik an *Also sprach Zarathustra*, daß Zarathustra ein schönes Sprach-existenz sei, welches uns Kraftvermehrung geben kann. Er sei ein Muthmacher zum Leben. Th.Manns leidvolle Liebe zu dem edlen, tragischen Nietzsche kristallisierten sich in *Doktor Faustus*. Um in der Dionysoswelt des Ewig/sich/selber/Schaffens und des Ewig/sich/selber/Zerstörens mit amor fati durchzuleben, schaffen beide Dichter ihre Dichtungen als „nunc stans“, dem Werden den Charakter des Seins aufzuprägen.

**Schlüsselwörter:** Ermöglichung des Unmöglichen, Karl Barth und Charlotte von Kirschbaum, das Schöne als Vermehrungskraft des Lebens, Dionysos, Martin Walser und Thomas Mann

**Abstract (English):** Martin Walser's "*The 13th chapter*" (2014) is the 3rd. novel of the trilogy of yearning. It is a kind of love-letter-novel between novelist Basil and Professorin Maja, the wife of a Nobel-prize-holder, without meeting each other. To make the impossible possible is the main subject. 1. The words-chain is a rainbow-bridge between god and animal, decoration of nothing. 2. Karl Barth and Charlotte von Kirschbaum realized their love. 3. The call of the wild is the instinct of the nature. According to S.Freud, the conflict between the unconscious and conscious, the pleasure-and reality-principle, instinct and reason, Eros and Thanatos, the will to live and the regression to death are the central theme of culture or art. 4. In "*The moment of love*" (2004) "L'Organisation" in La Mettrie's "*L'Homme machine*" is considered as the nature itself. According to Mafred Eigens theory "self-organization of matter", the nature contains the ability of special matter-form to create self-productive structure: the life itself. 5. Dionysos-myth seems to be connected with it. Karl Kerényi said: because the life-cell contains heredity, each individual mortal being has the embryo of the indestructible life. The old Greek called this <zoé> and that <bios>. Dionysos-Myth, his birth, being torn to pieces and rebirth is a symbol of the indestructible life. 6. Martin Walser, the Nietzsche-prize(2015)-holder, criticized Thomas Mann's negative critique against *Zarathustra*, and said, it is a beautiful poem-existence, which can give us encouragement and increasing energy to live. Th.Mann's suffering love to the noble, tragic life of Nietzsche is crystallized in *Doktor Faustus*. Both authors wrote their works as "nunc stans" in order to live through the life with amor fati to the Dionysos-world of eternal creating itself and destroy.

**Keywords:** to make the impossible possible, Karl Barth and Charlotte von Kirschbaum, the beauty as the increasing energy and encouragement to live, Dionysos, Martin Walser and Thomas Mann